

「札幌を彫刻する芸術家」

端 聡

Hata Satoshi

百九十万人が住む街へと成長した札幌。先人が築いた礎の上、皆それぞれに輝きを放ちながら、この街で暮らしています。この連載では、そんな百九十万人の一人に焦点を当て、その輝きの源に迫ります。



「札幌が芸術であふれている風景を想像したら、ワクワクが止まらないんですよ」。

こう語ったのは端聡さん。世界各国の美術展にオブジェや絵画などを出展し、高い評価を得ている芸術家である。

看板屋の息子として生まれ、幼いころから家業を手伝っていた端さん。夢は「画家になること」。それしか考えていなかった。

本格的に芸術の世界へ飛び込んだのは二十一歳のとき。公募展に三畳分にもなる巨大な絵を二つ出品した。「大賞を取るかも」と自信があった。だが、結果は惨敗。一次審査も通らなかった。「悔しかったですよ。納得できなかった」。しかし、その苦い経験が彼を奮起させた。

「東京で勝負だ」。小さな作品二つと、自分の作品集のファイルを手には飛行機に乗った。このたった三泊の旅路が、芸術家・端聡としての人生を切り開いた。

向かったのは、世界的に有名なデザイナーの事務所。もちろん面識など無い。しかし彼は躊躇せず事務所の前から電話をした。「北海道の端ですけど…」

と、まるで知人のような言葉遣いで。普通なら怪しまれて門前払いのところだ。だが、その破天荒な度胸が運を引き寄せた。そのデザイナーと会うことができたばかりか、作品を気に入ってもらえたのだ。そこからは、人づてに次々と話が進み、翌年、東京の有名なギャラリーで、個展を開くことに。間もなく端聡の名は世に知れ渡った。

その後の端さんは、作品制作のほか、舞台の芸術監督など幅広く活動。平成十六年にはモエレ沼公園オープンセレモニーの芸術監督も務めた。芸術家を目指す若者の支援もしており、十一月に開催する「500m美術館」も、彼が若者の作品発表の場としてプロデュースしたものだ。世界で活躍する札幌出身の芸術家は多く、数十人じゃきかないと話す端さん。「近い将来、札幌に彼らを集め、札幌の若い芸術家たちと共に国際芸術祭を開催したい」と熱く語った。「札幌という街を彫刻して、芸術あふれる都市を作り上げる。それが僕の仕事」。端さんのワクワクはこれからも止まりそうにない。

端 聡

1960年生まれ。札幌を拠点に活躍する芸術家。オブジェや絵画の制作はもちろん、それらを配置して空間全体を芸術作品にする。国内外で多数の個展を開催しており、日本やヨーロッパの美術展で賞を受賞。平成16年には札幌文化奨励賞を受賞した。



500m美術館

札幌の芸術家たちの絵画や映像、造形作品などを気軽に楽しむことができます。

■期間/11月1日(日)~30日(月) ■会場/地下鉄東西線大通駅~バスセンター前駅を結ぶ地下通路
■詳細/アートステージ実行委員会 ☎281-7117 ■ホームページ/www.s-artstage.com